

三面鏡

能村 研三

卒業から五十年

母校の市川学園の中学の卒業式に来賓として出席した。

市川学園は、今や東大への合格者が十数名という優秀な進学校として名をはせているが、私が在学していた頃は、ゆったりとした学校であった。後輩たちの勉学に励む姿は頼もしかった。

私は俳句の話をすることにした。まず、芭蕉の詠んだへよく見ればなづな花咲く垣根かな」という句を引いた。というのも、市川学園ではいろいろな所で「なづな」の名前がつけられている。学園祭の名前や、同窓会の会報、校庭にある池の名前にも「なづな」の名前がつけられている。薺の花は目立たないながらも、一生懸命に花を咲かせる。芭蕉も強く自己主張をする花よりも、密かに道端で咲く薺に注目してこの句を詠んでいる。市川学園の創設者の古賀米吉先生は、「よく見れば精神」「な

探梅の心 覚えの土橋かな

産土の恩 寵賜ふ 银杏芽に

啓蟄の三面鏡に 逃げ場無し

芽じたくに 園丁の指こまやかに

夕日差冠羽逆立つ雉子の声

流木は潮で煮しめし涅槃西風

うぶすなへ戻りて母の春厚着

春の弧を描く九十九里きらら風

あたたかき木組み確かな灯明台

春の暮もののふがため土間竈

「ずな教育」を建学の精神に置き、生徒一人一人の個性を大切にすることを教育方針としたことを話した。

もう一つ、かつては旧校舎で今はグラウンドになっている所に、市川学園で教鞭をとった能村登四郎、林翔、福永耕二の句碑が建立されており、その一つである登四郎の句について話した。

ひらく書の第一課さくら濃かりけり

高校に入学する頃には真間川の桜並木も盛りとなる。やがて一学期が始まり、印刷のインクの匂いがする真新しい教科書を手にした時、この瞬間の新たな心意気をしっかりと感じとってほしい。先生も生徒も同じ気持で今年も頑張るぞという気持ちになると思うので、是非この句を思い出して、新しい進路を迎えていただきたいと話を結んだ。

式辞を述べながら壇上に立っていると、ちょうど五十年前に学園を卒業した日のことが思い出された。

蒼茫集



捨身のいろ

酒本八重

*深山椿捨身のいろを尽しけり

この峽に生まれし蝶と媪かな
老人の指体操と桃の花
和合神扉の奥にさくら咲く
手の内は見せぬと臙深くせり
法被衆修二会の箒もて侍る

猫の恋

上谷昌憲

拝啓の後のつまづき冴返る
トンネルの切れ目切れ目の梅日和

*溪流の白つむぐ音探梅行
過去完了現在完了猫の恋

猫の恋ドラマは後半へと続く
恋猫に漆黒の闇なくなりぬ

絵らふそく

頓所友枝

*子を逝かす罰と受くるや春の雷
自転車に翼生えくる春一番
余寒なほ使ふに惜しき絵らふそく
土偶雛真の豊かさ漂へり
あたたかやベンチひとつが吾が陣地
河から川流れを追うて鳥帰る

深くなく

辻美奈子

犬槇の大樹のうねり春疾風

亀の子潜く深くなく浅くなく
黄砂くる膝でおさへて段ボール
* どの針もあはき影持つ針供養
思ひだすことも祈りや鶴の引く
ぬばたまの脳髓の闇さくら季

点描 田所節子

折れやすき心を叱り霜柱
鉦彫めく雪嶺聳え日本海
* 魚は氷に上り土竜は土もたぐ
白梅のけぶれるやうな日ざしかな
点描の光木の間に花辛夷
体操の号令一・二木の芽晴

舟の形 吉田政江

* 紙風船たためば舟の形して
信号の赤を濁して涅槃雪
風が切る父子の声や紫雲英摘
げんげ野に気付けば一人外れをり

別棟の夕餉に呼ばれ臙かな
唇の渴きをぬらし花の下

短調 千田百里

春はあけぼの母の水仕の一生かな
* 去る人来る人スクランブルの弥生かな
短調マイナがよし臙夜のギターソロ
同人研修会 三局
列に蹤き何だ坂こんな坂犬ふぐり
老夫婦寄れば菜の花蝶と化す
宴果てておぼる伝ひに戻るなり

いななき 小野寿子

隠し田を守りつつ咲く山桜
いつの間にかこの雪も消えにけり
* 世に遅ること畏れつつ耕しぬ
望郷も春愁も似たもの同志かも
いななきに海風甘し春吹雪
白神の風初蝶に力貸し

彼の刻 荒井千佐代

巨船離岸す春落日を船腹に
サーカスの杭の抜かれし芝桜
蝶生まる亡き父据糸し庭石に
諦めし後の水雲に酔を利かせ
ファミレスに一人の時間蝶の昼
*被爆地にけふも彼の刻飛花落花

春の星 今瀬一博

青麦や大地に疾き雲の影
子の歌ふ校歌は知らず春の星
春北風漉かれ漉かれて金の星
眸を入れぬ達磨ごろごろ辛夷の芽
*梅東風や「やうに」で結ぶ絵馬千枚
白子干売る潮荒れの十指かな

独り 大川ゆかり

肩幅を思ひ出しつつ糸編む
春寒し梓のみ残る観覧車

*ものの芽に囲まれてゐて独りなり

バレンタインデー何もしてあげない
白酒の口直しなる越の酒
鐘霞むまだいくらでも眠れさう

向う脛 細川洋子

しやりしやり洗ふぬばたまの黒蜷
グリーンアスパラガス少年の向う脛
翔び立てる形に倦みし白木蓮
*朧夜の木の家にある息遣ひ

日の粒子ぷちぷちと山菜莢の花
行く春の築地の吐丹(トタン)寂れたる

月おぼろ 林昭太郎

青き踏む背中に翼生えるまで
果実酒に果実の沈む朧の夜
*朧夜のなかなか渡りきらぬ橋
屋根石に重さ加はる朧の夜
にはとりの声のくぐもる朧の夜
月おぼろ羽化するものは羽化急ぎ

吾も獣

森岡正作

風船につながれ嬰の立ち上がる
のどけしや数ふに飽くる土竜塚

* 吾も獣いのちの森の朧嗅ぐ

春浅し怒濤の次にまた怒濤

春らしき名をもて上総一ノ宮

犇きて怒濤を知らぬ雪解川

芽吹き待つ

小松誠一

着ぶくれて常より空くる車間距離

芽吹き待つ古木の幹の力瘤

如月や青に溶け込む昼の月

白鳥の去りし田に立つ風波かな

* 珍しき文具購ふ夢見月

定石は無視と放埒春うれひ

身支度

安居正浩

春夕べ父ゐるやうな煙草の香

雛あられ乗せ手のひらの浮き上がる

* 蛇穴を出づ身支度は簡単に

故郷と思ひて春の土を踏む

いちめんの菜の花空のはじけさう

本性は根暗なるかも享保雛

解脱ごころ

藤原照子

霊山のなだらかに晴れ鮎を挿す

杉花粉飛ぶや平家の隠れ里

* おぼろ夜の酔ひとも解脱ごころとも

ひと声に一齐に退き磯菜摘

「蘇(そ)」なるもの食うべ大和路月おぼろ

房総の臍の丘陵青き踏む

白二色

菅谷たけし

日の梅と日蔭の梅と白二色

* 税務課へ春泥つづきぬたりけり

菜の花や潮目さやかに安房の海

藪椿 絵筆洗ひし水の色

梅の花禁煙二年過ぎにけり

ちちははを夢へ誘ふ春炬燵

潮鳴集



秘めごと

栗原公子

空調音

七田文子

春の雪捨つるに惜しき菓子の箱
霾やノートは昔ざら紙で
空翔くる風船だれか泣いておる
桃の花泣きだす前の口ゆがみ
* 詩詠むは秘めごとに似て朧の夜

蛸蚪の紐

埴誠一郎

* 家系図のはじめは分家蛸蚪の紐
菜の花の明るき朝母覚めず
百歳の遺影祀りて鶴引く日
年の豆百から七を引くドリル
絵本へと戻る赤鬼節分会

左党の仕切る探梅もそのあとも
波音の崖這ひあがる紅椿
* 束縛か絆か風船紐ついて
髪切られぬて鏡中の春の雪
冴返る祈りの間の空調音

謎めいて

内山花葉

* 子育てのやうしつかりと麦を踏む
春の闇路地奥いつも謎めいて
おぼろ夜のハイジのやうに眠り落つ
寝返りて肋しなやか春の闇
朧夜の何かすり抜けゆく記憶

花 冷

菅原健一

気迷ひの芯に居座る春の風邪
花冷のただ念入りに歯を磨く
濁点の付かぬ音ふえ暖かし
* 三月の水にほほ糸む喉仏
三辺の余りし炬燵けふは無く

尽きる

吉武千束

枯蓮尽きる尽くすといふ言葉
* だんだんと体力埋火のやうに
雛人形無くてやさしい姉がある
少女起立卒業証書総代に
ゆるやかなミルクの渦や花は葉に

正倉院

峰崎成規

さみどりを梳きつ隠しつ春の雪
せつかちもおつとりもぬて地虫出づ
リベルタンゴ春宵刻む絃と弓
* 黄砂降る東の果てに正倉院
縄文の判じ物めく蟻の道

音

藤代康明

* 薬効の六面にあり紙風船
北山杉の枝打つ音や冴返る
音たてて陽を返したる薄氷
春禽の一声一山膨らまし
喧騒を濾過する森や蝶の昼

輪 唱

諸岡和子

腕振れば歩幅広がる花菜風
ホップステップ春光へ脚しなふ
輪唱の誰か混線うららけし
校庭の土俵の新たな木の芽風
憂ふこと風に預けて青き踏む

* 海は球形

大沢美智子

ゴシックの塔屋根に湧く鳥の恋
雪折れの松の匂へる雛納
祈りとは白一斉の幣辛夷
* 朧夜や鰭あるごとく歩みゆく
房総の海は球形鳥帰る

飛鷹選評



能村 研三

動脈も枝も紅色 春きざす 栗山みどり

普通「もみじ」と呼ばれている楓の木は、春になると鮮紅色の可愛い芽をつける。赤みを帯びた紙繕りのような葉が出てくるので「楓の芽」は春の季語に分類される。鮮やかな赤い色が印象的である。そんな楓の芽を思いうかべた。人間の身に循環している血液も赤い。私たちの生命を保っているのも動脈のおかげである。動脈は体の中心部を通っているので外から見えないが、医学的に動脈は赤色に表示される。

茅葺きの茅より生まる雪解光 須賀ゆかり

この句を読んで、飛驒白川郷の茅葺屋根の雪解の頃の風景を思い出した。合掌造りの屋根が急勾配になっているのも、積雪量が多いため、降り積もった雪が重みで自然と下へ落ちるようになっているそうだ。春が近づくと茅葺屋根から雪解のおびただしい雪が降ってきて、きらきらと玉すだれのようにも見えるのである。

まんさくや縄文系といふくせ毛 須田 千代

まんさくは春を告げる花で、他に先駆けて「先ず咲く」が誰だったものともいわれこの名が付いた。黄色い四弁花が稲の豊年満作を思わせるからとも言われている。いずれにせよ野趣味があり細長いひも状のちぢれた花は縄文人のくせ毛を思い起させた。

この駅のこの木のベンチ卒業す 清部 祥子

都会の駅であると、改札をスイカで通過する無味乾燥な感じになってしまいが、ローカル線の小さな駅であれば、待合室のベンチも使い込まれた感じがする木製で思い出も残る。卒業という大きな節目を迎え「この駅」「この木」と畳みかけた表現が卒業への思いを深くした。

えぶり大夫 卍に振りけり くとつひろこ

青森の八戸の「えんぶり」は、八戸地方に春を呼ぶ豊隼祈願の郷土芸能。その名は田をならす農具「えぶり」や、「いぶり」に由来すると言われ、冬の間眠っている田の神をゆきぶり起こし、田に魂を込める儀式である。大夫と呼ばれる舞手が、馬の頭をかたどった華やかな烏帽子を被り、頭を大きく振る独特の舞。迫力のある動きが一句から読み取れる。(以下略)

沖作品



能村研三選

* 動脈も枝も紅色春きざす

路のたう光の裾に集ひけり

春一番スイッチ入る第六感

春星や鳴るオルゴール開く空

へとへとの今日クリアして二月尽

* 茅葺きの茅より生まる雪解光

春光の小さくほどけて万華鏡

恋猫の戦ふほどの一途さよ

春眠や膝に閉ぢる鳥凶鑑

一本の道を残して土手青む

* まんさくや縄文系といふくせ毛

余り布接ぎし彩り日脚伸ぶ

■ (木無) 林の一樹一樹の雪間かな

路地裏の絵本売る店春満つる

練り切りの鯛に平日や雛祭

長崎

栗山みどり

埼玉

須賀ゆかり

千葉

須田 千代

芽柳の吹かるるままや川明り

亀鳴くや国東塔の夕闇に

引鳥のプラットホームの一樹かな

* この駅のこの木のベンチ卒業す

ああのこうのと家電物言ふ春日かな

火を囲み不寝の番なる机衆

奉納のえんぶり祥気湧く社

* えぶり大夫正に軀振りけり

離さるる童えぶりの作り髪

月を見て己が影摺る机舞

黒潮の洗ふ岬の水仙花

探梅や有為の奥山踏み分けて

おほどかな天平仏や水温む

* 春泥の靴のずらりと浄瑠璃寺

春慶の匙にふるふる蕨餅

清部 祥子

くどうひつこ

茨城

榎本 秀治